

平成 30 年第 2 回定例会 厚生常任委員会

平成 30 年 5 月 16 日

鈴木委員

ともに生きるを拝見していて、抜本的なことを聞かせてください。

まず、資料 1 ページに書いてある開催目的の障害者って誰ですか。どういう障害のことを言っているのか。共生社会推進担当部長兼共生社会推進課長 障害につきましては、例えば、身体障害や知的障害、精神障害等々ありますが、これにつきましては、その障害者の範囲ということについては、その種別ですとかによる区別ということは考えておりません。鈴木委員 私が何を聞きたいのかというと、聴覚障害、視覚障害、重度障害のような人たちは、あの中で、私は少なくとも見なかったです。はっきり聞かせていただくが、11 万 3,000 人来たのだけど、これはどうやってカウントしたのか。

共生社会推進担当部長兼共生社会推進課長

様々なイベントの来場者のカウント方法をいろいろ調べさせていただいた中で、会場を一定のエリアに分けて、そのエリアごとの、そこに滞在可能人数ということから、その混雑率というのを掛けまして、それを一定時間ごとに区切りまして集計した数字が、11 万 3,000 人という数でございます。

鈴木委員

先ほど言っていたラーメン博も含めて、ぐちゃぐちゃになっているときは、どうやってカウントしたのか。

共生社会推進担当部長兼共生社会推進課長

エリアごとに分けてです。

鈴木委員

ラーメン博とごちゃごちゃになっているから、詳細にとっている。

共生社会推進担当部長兼共生社会推進課長

ステージ前、ステージ後方、あるいはスポーツのコーナー、アートのコーナーなどに分けまして、これの面積における人数と、この混雑率を掛けたところでございます。

鈴木委員

そういうようなことで、11 万 3,000 人なんて数字を出さないでほしい。それなら、逆に、障害者は何人来たのか。

共生社会推進担当部長兼共生社会推進課長

そのような問い掛けはしておりませんので、私どもとしては、その中での障害者の方がどのくらいかというところは把握しておりません。

鈴木委員

資料に開催目的として書いてある、障害者への偏見や差別的思考を排除していくためとなっている。この主語は誰なのか、障害者なのだろう。その人間をどうしてカウントしないのか。11 万 3,000 人が何に関係あるのか。障害者を何でカウントしないのか。イベントをやっている、こんなおかしい話はない。主語である人のことを本来だったら書いて、この人たちが何名来ましたっていうようなことが、本来のものなのではないか。

共生社会推進担当部長兼共生社会推進課長

そういった把握につきましては、していないという事実がありまして、なかなか来場者全ての方に障害の有無ということを知ることができないと思います。

鈴木委員

そのような答弁は聞きたくない。三千数百万円かけているのだから、11万3,000人集まったというのなら、これはあなた方の成果だろうから。ストレートに書けばいい。だけど、言ったように11万3,000人って本当なのかと疑わしいということが一つ目。

二つ目に、県がやっている主催の目的である障害者のカウントもしないでやる、これってどうなっているのか。少なくともこのイベントで、私は見ませんでした。私が何を言いたいのかというと、やれ、この人が出ましたというのは出演者側なの。重複障害とか、本来なら一番触れていただきたいという人たちがいなかったイベントということなのだよ。

三つ目には、この中で開催の目的が三つ書いてある。この文書を見ると、普通の会社だったらすぐに突き返されます。一つは、これは、あなた方が逃げやすいよう書いてある。なぜかという、各論で書いてある。スポーツ広場はどうかの、こんな関係ない。そうではなくて、私が言いたいのは、障害者の偏見や差別的思考を排除していくためというのが一つなのだろう。これに対して、あなた方はどういう総括したのか。これが一つ。二つ目は、これまで障害者と接点が少なかった人にも参加を促した結果はどうだったのか。三つ目は、憲章の理念をみんなが体感してということの、この成果はどうだったのか。この三つがどこにも書いていない。

それで、あなた方は、これやった、あれやったって書いてある。開催目的がこうなっていたら、こうなりましたというのが出るのが本来のレポートです。何も書いていないとは言わないが、この中には書いていないだろうと言っているのです。あなた方がやった開催目的と成果はどこいったのだと言っているのです。

もう一つ言わせていただく。突然この開催目的の中に、あなた方は本当に、障害者への偏見だけでいいのか、障害者という主語を使っているが、みんなあつまれなのだろう。あなた方がつくったこのホームページの中にも、クレイ勇輝さんという方が書いてあるではないか。人が集まる、性別、年齢、人種、見た目、出身地など、細かく分けたがるが、結局あなた方が目指すところって、私らはみんな同じようにこの世界に生まれてきたと、これがそうなのではないのか。では、主語は障害者でいいのかと言っている。LGBT、外国人、本来なら、これら全部カテゴリーの中に入ったものがみんななのではないのか。こういうものを平気で出してくると、これをしっかりやったら1日中でもしゃべるよ。報告を朝もらったから見ただけで、こんなようなことがある。もう一つ、参考の12ページの中で、障害者とともに生きることについて尋ねたところ、回答者の32.5%がこのようなイベントを続けてほしいと言われたと。インタビューではどういうふうな聞き方をしたのか。

共生社会推進担当部長兼共生社会推進課長

これは、インタビューの質問項目で、この項目をお示しして、どれに当たり

ますかと、 イベントで主に体験された方の体験の後に、インタビューをさせていただきました。

鈴木委員

どういったインタビューの聞き方をしたのか。

共生社会推進担当部長兼共生社会推進課長

インタビューとしましては、報告資料の詳細版の18ページにインタビュー結果というところがございますが、こちらのインタビューの回答項目を設けた上で、該当するものをお答えいただいたという形で実施させていただきました。

鈴木委員

確かにそうだ。みんなあつまれば良かったかと聞けば、よかったと言うだろう。共生社会の中で、このイベントというのは良かったですかって聞かれたら考えるだろう。単発質問というのは、世論調査でもそうだけど、今、物すごく新聞社だって気を使ってやっている。安倍内閣を支持しますか、でも、それをブレークダウンして最終的なものを出すのです。こんな聞き方をして、申し訳ないが私はこれ全部考え直します。先程から自民党がおっしゃっているが、考え直したほうがいい。こんなふざけたイベントで三千数百万円使うぐらいだったら、検証もなされないし、県立高校のどれだけのトイレが整備できるのかと思った。

最後に、ミビョーマンのことを先ほどから聞いているが、ミビョーマンは結構だが、子供に未病ってどうやって教えるのか。

未病対策担当課長

未病という言葉自体は難しいとは思いますが、小さいうちから規則正しい生活をして、大人になってもきちんとした生活が送れるようにいろいろ、野菜を食べようとか、夜更かししないで寝ようとか、そういう基本的なことをきちんと教えていくということが大切だと考えています。

鈴木委員

私も親として2人を育てたが、それは親の責任が半分以上だろう。それをミビョーマンが何をしようというのか。私の答えを言ってもしようがない。子供に何をどうやって伝えるの。健康医療局長はこれをどうしたいのか。

健康医療局長兼未病担当局長

子供に対しては、未病という言葉伝えるということはなかなか難しいですし、親でもなかなか難しいというふうに伺っていますので、実際に、要は子供のころの生活習慣が、大人になっても非常に直すのは難しいということなので、食、運動、社会参加、これを子供に分かりやすく、好き嫌いしないで御飯を食べましょうね、あとは、友達と仲よく外で遊びましょう、運動もしましょう、そういうことを教える、チラシも作っておりまして、それをミビョーマンが配り、かつ、裏には保護者の皆様へということで、未病というこういう考え方があって、子供のころからの生活習慣というのが非常に重要なのですよって、もちろん親が子供にやるというのはおっしゃるとおりなのですが、それを一層、やはり親にも子供たちにも分かってもらうためのツールの一つとして、ミビョーマンを媒体として、要は、食、運動、社会参加、これがすごく重要だということを、子供にも伝えたいというふうに思っております。

鈴木委員

伝えたいということと施策とは別でしょう。私が言いたいのは、これは施策です。施策の中で、要点は二つある。しっかり食べましようって、今おっしゃってましたね、食べられない人も中にある、貧困の問題一つあるよ。そういう人たちというのは選べないのだよ。それは、私、全部だとは言わない。二つ目、要するに、早寝しましようと言ったって、早寝させられないような社会がある。

私は言いたい。やりたい理念というか方向は私は分かった。だけど、施策として、子供に対する未病というのを、ブレイクダウンをしないで、このまま何かミビョーマンとか何とかというのをやるということは、本当に申し訳ないですが、大変に愚かな、前に局長に言ったように、予防と未病は何が違うのか。未病ってわざわざ調べなきゃならない労力とコストをかけて、予防だったらみんな知っているが、それを知らせることと、予防ということをしかにやらせることと、コストとまたその他のことを考えたら、私は予防を早く進めたほうが良いと思います。

健康医療局長兼未病担当局長

確かに鈴木委員がおっしゃるように、基本的には病気にならないようにしようということですから、未病と予防、どこが違うのだと、前回の委員会でも御質問いただきました。基本的には、できるだけ自分で体に悪いことをしないでよくしていこうという、これは、同じ多分考え方だと思います。

ただ、県といたしましては、前回も御答弁いたしました。あえて今、未病という言葉を使って、自分の体が今は健康と病気の間どこにあって、それをできるだけ均衡のほうに持っていこうという、あの考え方をまず自分でしっかり理解をしていただくための、一つの言葉として未病というのを伝えています。ただ、子供には、未病を伝えというよりも、やっぱり実際に体にいいことをしていこうということ伝える、それが施策として必要だと思っております。

貧困の問題というのは確かにあります。選べない。そこについては、今年から福祉子どもみらい局とも連携しまして、そういう子どもにも貧困と未病の考え方に基づいた健康づくり、これを県の施策として進めていきたいと思っております。

鈴木委員

御答弁は御答弁として受けましよう。ですが、私は、未病というようなことを否定はしていない。してはいいないが、私が言っているのは、コストをかけて施策としてやるということが、これ以上ミビョーマンだったらどうのこうのっていつて、だって、知事自身8割近くが未病という言葉の認識があるとか何とかって言っていたではないか。そうであるのであるならば、それに伴ったものというのを、しっかりもう一度つけていただきたいこと、それを要望して私の質疑を終わります。